

ハルと桜の樹に添えて

花は時が来るとただ咲く、人の手で大切に育てられた花も、道端に咲く花も、山の険しいいただきに咲く花も、寒い冬の日に咲く花も、真夏の炎天下のもとで咲く花も、どの花も皆そこに咲くのがあたりまえのように咲いている。そんな花たちに出会うと、ふと思う。どうしてそんなに自然に咲けるのだろうか？と。

日本人に生まれてきて、春になると当然のように桜を楽しんでいるが、桜の樹は夏と秋と冬をどんな気持ちで過ごしているのだろうか？と思う。春になると、まるで一年をじっと耐えて、咲くための力を蓄えて、やっと咲くことができる喜びを表しているかのようにパーっと咲いて、見事なまでにハラハラと散っていく。

日本の人々は、戦争と言う深い悲惨な歴史から年月をつないで、戦後を精一杯生きてきたのに、2011年に東日本大震災にあい、深い深い悲しみに沈んだ。まるで自分たちを全否定されたかのような思いから必死に立ち上がり、自分の人生を生きる喜びを見つけている。

1964年以来の東京オリンピックを2020年に迎える時代に生きる時、チームワークの精神、日本の伝統的な文化「結の精神」を考えずにはいられない。たった一人で生まれてきて、たった一人で旅立っていく人生の中で、みんなで繋がる喜びやみんなで何かを作り上げる喜びに出会ってこそ、自分の存在に喜びを感じるのかもしれないと思う。

この国には、自分の命いっぱいに生きている人、誰かのために生きて、自分をさらに最高に生かしている人がたくさんいると思う。

「ハルと桜の樹」は、そんな人々の思いを伝えたいと思って書いた物語です。そして、たくさんの奇跡を重ねて生まれてくる命が、この国からたくさん誕生して育って行ってほしいと願う作者からのメッセージです。

争いごとのない世界に誇れる素晴らしい国であってほしいと願い、桜の樹が咲き誇っている100年後の未来を思いながら……。

清水まなみ